日本語教育実践研究（2）
―「待遇コミュニケーション教育／学習」の実践―

蒲谷　宏

日本語教育実践研究（2）は、「待遇コミュニケーション教育／学習」について、実際の教育活動を通じて研究するためのクラスです。主に、中級後期から上級前期にかけての学習者が受講する口頭表現クラス（口頭表現６Ａ クラス）を実習の場として、学習者の口頭表現における表現能力（コミュニケーション能力）を高めるために、どのような教育／学習をすればよいのかを実践的に考察していきます。それとともに、具体的な教材や教育／学習の方法論についても検討していくことになります。

０６年度春学期の受講生は７名でした。今期は、「待遇コミュニケーション」「言語習得」「音声・音韻」「「教育文法」「語彙教育」「文章・談話」の各研究室に所属するメンバーの参加によって、担当教員、受講生相互に有益な交流の場になったと思います。今学期も引き続き、学習者の「待遇コミュニケーション」能力を高めるためにはどうすればよいのか、という話し合いを重ねつつ、実習クラスでの授業運営を進めました。〈学習者が、ある「場面」において、「意図」を持って、コミュニケーションを行う能力を身につけ、高めていくためには、どのような授業を行えばよいのだろうか〉という課題の解決に向け、①学習者の問題点を修正する方法としての、〈練習―訂正―練習〉といったロールプレイの二段階法をどう実施するか、②学習者の〈「意識化」―「実践（練習）」―「定着」〉といった流れをどう作っていくか、③学習者自身が、〈「きもち（意図・様々な意識）」―「なかみ（表現内容）」―「かたち（表現形式）」〉をどのように一体化していけるのか、といったことを実践・考察のためのキーワード・枠組みとして、取り組んでいきました。

今期は、再びチームティーチングを行い、引き続き「ロールプレイ」に関する実践を通じて、口頭によるコミュニケーション能力をどう高めていくかということについて考察を進めました。今回も、ロールプレイに関して、実習生全員が時間をかけて取り組んだ成果をまとめ、掲載することになりました。ロールプレイといっても、その方法が効果的に行われた実践と、必ずしも効果的ではないものとがありますが、そうした問題点や課題が実践を通じて考察されています。「待遇コミュニケーション教育／学習」に関する課題について、自らの具体的な実践により解決策を考えていくという姿勢をもって、今後も考察を続け、検証していきたいと考えています。

（カバヤ　ヒロシ・日本語教育研究科教授）